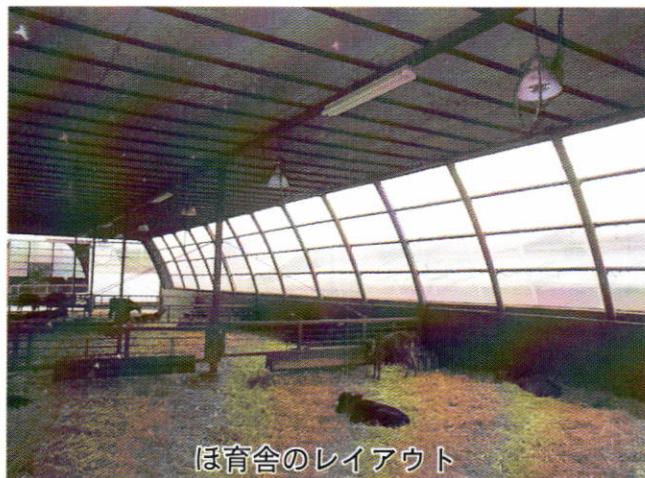


ほ育舎

ほ育舎は、概ね0～6ヶ月の子牛を飼養する牛舎です。ほ育舎はあまり普及していませんが、ほ育期の子牛を一元管理し、作業を省力化するために建設する動きも出てきました。また、最近では自動ほ乳システムの導入を前提に、ほ育舎を建設する事例も見られます。

ほ育舎は離乳までの子牛を単独で飼育するペンを並べたものから、集団生活にならせるため、離乳直後の子牛を群管理する施設を加えた牛舎もあります。いずれのほ育舎であっても、そのレイアウトは子牛の健康管理や疾病の感染予防ができるように、つぶさに子牛の観察がしやすく作られる必要があります。

ここでは、ほ育舎のレイアウトや最近話題の自動ほ乳システムを用いた施設について、現地事例を交えながら見てみることにしましょう。さらに、ほ育に関する労働実態調査から、ほ育作業の労働について一緒に考えてみましょう。



ほ育舎のレイアウト



自動哺乳システムを用いた群管理



ほ育作業の労働を考える

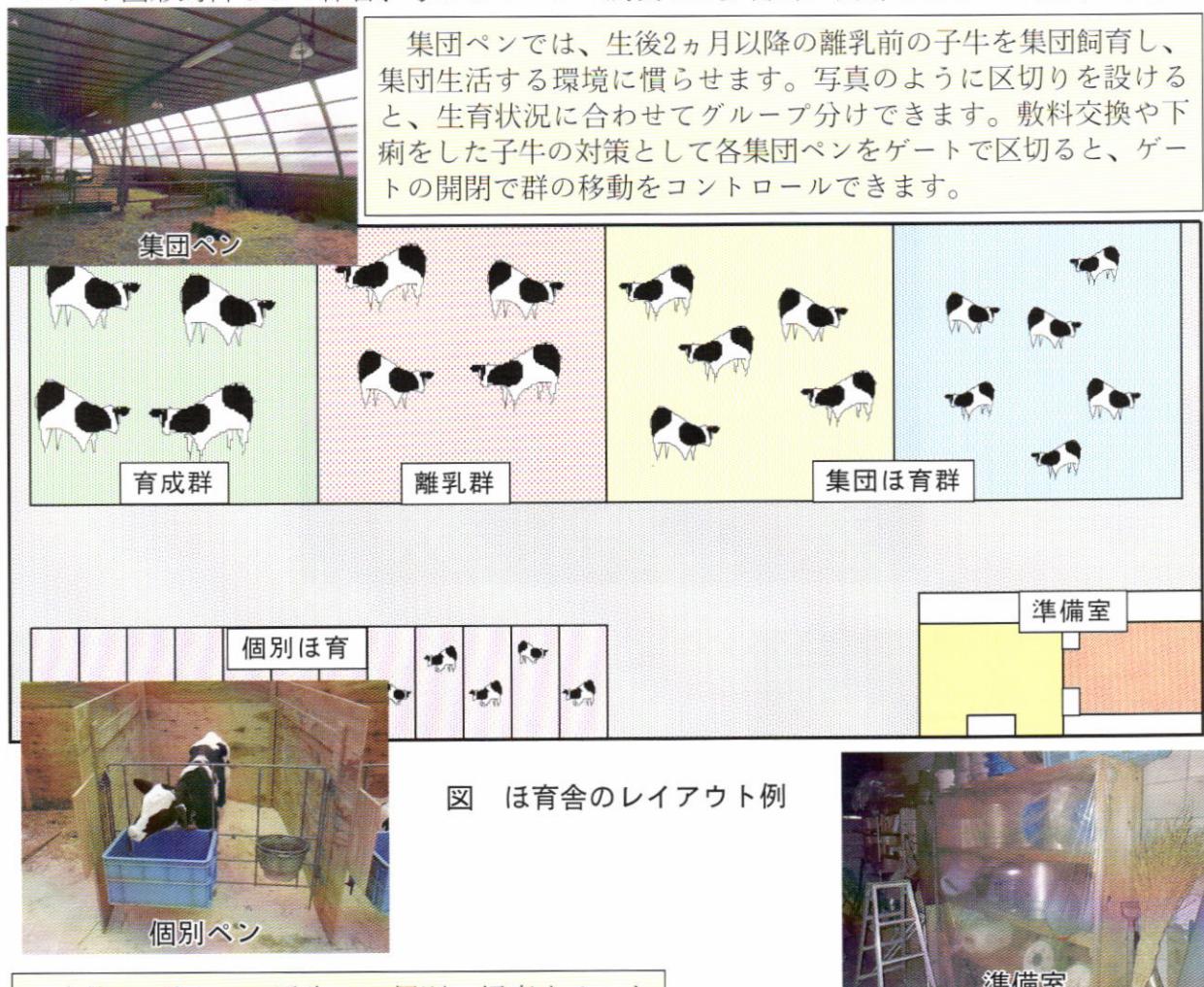
ほ育舎のレイアウト

ほ育舎は、生後2ヵ月目まで個別に飼育する個別ペンと離乳までの間に集団飼育に慣らすための集団ペンで構成されています。さらに、準備室を設けるとミルクや固形飼料、ほ乳ビンなどの保管、ミルクの調製など多目的に使用可能な空間ができるので便利です。

ほ育舎のレイアウト例（新規牛舎編）

ほ育舎のレイアウトは、子牛の観察やは乳作業を考慮して、作業がスムーズに流れるように各施設を配置することが肝心です。

ほ育舎では育成牛や成牛と違い、寒冷時の保温対策が必要です。特に個別ペンで飼育している場合は保温対策が必要です。また、集団ペンでは子牛の下痢などの疾病対策として、集団から疾病個体を隔離する工夫も必要です。このほか、ほ育舎の出入り口に準備室を設けると、粉ミルクや固形飼料などの保管、与えるミルクの調製など多目的に使用できるので便利です。



生後2ヵ月までの子牛は、個別で飼育することが望ましいため、個別ペンで飼育します。屋内なので屋根は必要ありませんが、寒冷時には上を毛布で覆ったり、電灯などで保温している例も見られます。

個別ペンは、カーフハッチの管理に準じた敷料交換や消毒などの作業が行えるようにしましょう。

準備室は、ミルクや飼料、ほ乳ビンなどの器具の保管、ミルクの調製を行うなど、多目的に使用できる空間です。

準備室の出入り口に消毒槽を設け、病原菌の進入防止に努めましょう。